

むかし「局アナ」いま「隠居」



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中

私が自分の表札を持ったのは一九四六年(昭和21年)四月、13歳のときでした。旧制 徳島中学では、入学すると表札が配られ、門や玄関にそれを掲げるといふ校則がありました。「敗戦の日」から八カ月、食べるものも、着るものも何もない時代です。学校がくれた表札たるや、カマボコ板より薄っぺらい小さな板切れを濃い国防色(黄土色)に塗った代物で、中学校の校章の下に白字で「上田博章」と書いてありました。

入学試験を受けて入った学校だっただけに、嬉しいことは嬉しかったのですが、何しろ農家の納屋の二階で侘び住まいの身分です。表札を掛ける門や玄関がありません。そんな貧しい住まいから脱出するのに 半年ばかりかかりました。



秋風が吹きはじめたころ、無職だった父が借金をして徳島市内の借地に安普請の小さな家を建てたのです。そこで開業した麻雀屋の玄関に父の表札が掲げられ、その隣に、私の薄っぺらい表札が並びました。人通りの多い場所だけに徳島中学のマークが付いた表札は眩しかったです。

子供のころ暮らしていた東京の家の近所に「〇〇寓」という表札を出しているお宅がありました。「お父さん。あの字、何て読むの?」

そりゃ聞きますよねえ。国民学校で「寓」という字は教えていませんから。私の質問に対して、父は「寓」という字の読み方と、その意味、更に「寓居」とは「ほんの仮住まいなんです」という謙遜の意味もある...そこまで教わりましたが、「妾宅」に多い表札だとか、「お婆さん」とは何か...まで教えてはくれませんでした。何しろ国民学校低学年のガキでしたから。

一九三三年生まれの天皇陛下や私は、物心がついたときから「戦時中」でした。街でも汽車でも電車でも、兵隊さんの姿に接しながら育ったような気がします。

勝つて来るぞと勇ましく誓って国を出たからにや...こう歌って 出征兵士を送ったのは、「露営の歌」で、一方「出征兵士を送る歌」は、

♪ 我が大君に召されたる 生命 栄えある朝ぼらけ...

...という歌い出しでした。いずれも威勢のいい歌で、こんな歌で戦場に送られた兵士の留守宅では、こんなプレートが表札の横に掲げられていました。



私が長野の神郷村に疎開していたときの勤労奉仕は、農家の働き手を徴兵された留守宅の農作業を支援する労働だったのです。

戦況が悪くなってくると、出征兵士が英霊(戦死者の遺骨)となつて 村に帰つてきました。

一九四五年(昭和20年)七月13日(金曜日)に長野の神郷国民学校六年生の私が書いた70年前の日記です。

十三日豊野(三回運)に行き英霊おへに駅へ行つた今日 豊野へ行つたり 来た日だ

黄色くなった→の頁は、秀学社発行の「中学生 国語参考書」に採用され、毎年掲載されています。

一九七〇年代、私が毎週金曜に担当したDJ番組は、リクエスト葉書を毎月一回、抽選して当選者に10万円を届けるのですが、当選者を直ぐには発表しません。

同じ番組のDJで、別の曜日を担当している誰かが中継車に乗って、実況中継しながら当選者の家を訪れ、賞金を届けて吃驚して頂く...という趣向です。



その日、私が賞金を配達した当選者のお宅は尼崎市寺町の古い民家でした。

マイク片手に喋りながらドアの上の方をふと見ると「出征軍人ノ家」と書かれた表札が掛かっています。

何十年ぶりかで目にした徴兵制度の名残は胸に迫るものがありました。

戦後の少国民だった私は、日の丸を振って出征兵士を見送った身ですから、一言あって然るべきでしょう。「戦火を免れたこの家にも戦争の傷痕が残っている」

こんなことを喋りながら当選者のお宅のピンポーンを押したのです。

あとで 学徒動員世代の番組プロデューサーが、

「あの 出征兵士の表札を拾ったセンス、よかったよ」とお褒めの言葉を頂戴しました。



「出征軍人ノ家」が目立った時代「赤十字社員」の表札もよく見かけたものです。

子供の頃 それを見て、「赤十字の社員だから、毎日通勤して月給を貰うのだ」

と思っていたものですが、あれは、従業員ではなくて「赤十字社に寄付した人」を社員と呼び、昔は町内会や村が一括して寄付すると、各戸に社員章を貼り付けるものだと知りました。

*

左の古びた木製の表札は、ウチが麻雀屋だったころに常連客のハンコ屋さんが、高校生の私のために書いてくれたものです。



私が一人前になるまでは実家の玄関で 父親の隣に掲げてあったこの表札は、就職をきっかけに勤め先の大阪へ持って来たのですが、下宿とか アパートでは出番がありません。

表札は引越し荷物の中でくすぶったまま、池田市、豊中市など、阪急沿線を転々としていたのです。

この表札を一戸建て分譲住宅に掲げ、所帯を持ったのは26歳のときでした。

分譲住宅ながら、小さな門があるにはあるのですが粗末な門で、表札を掛けることができませんし、玄関ドアの周りは全面モルタル塗りで、クギを打つ場所がありません。



写真のように 不安定な付け方で、何十年も歪んでいたのです。

この表札を掛けて四年後、待望の跡取り息子が誕生し、喜び過ぎた私は、産まれたばかりの俵の表札を掲げて、御近所の笑い者になったことがありました。

*

話は変わりますが、今やネットでは地図だけでなくその景色まで眺められるようになっています。

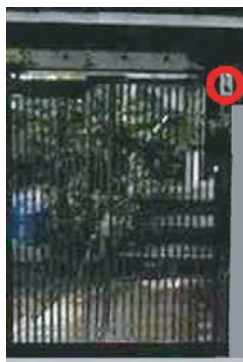
以前に比べると 画像も一段と鮮明になりました。

：となるとプライバシーが問題になって来ます。

つまり、通行人の顔とか道路に沿った住宅の表札が、どこの誰だか判らないよう細工しなければなりません。「然らば上田家は如何？」

早速 検索してみました。往来に面した拙宅の門は一応、和風の門は門ですが、アルミ製のプレハブ：即ち「安モン」です。

画像を切り取って 拡大したのでボヤけていますが、○で囲んだ表札は、「上田」という二文字だけですし、



字画が少ないので 容易に「上田」と読めたのでしよう。御覧のように、すっかり塗り潰してありました。

*

隣の茨木市に嫁いでいる長女が近所を歩いていたなら、グーグルのカメラクルーに撮影され、それがネットの

マップに載りました。左の写真がそれです。白いマスクをかけているように見えますが、マスクではありません。



プライバシーを守るためのつべらぼうに加工されているのです。

当人も、自分のすぐ横をゆっくり走り抜けて行ったストリートビューの車に気が付いたらしく、あとで「グーグルマップ」を見たら、手提げの模様、服装、背景などから自分だと確信したようで、

「グーグル マップに、私が載ってるわよ。私の美貌は潰されてるけどネ」

こんなメールとともに、添付されてきたのが、右の写真でした。

えらい世の中になったものです。

ご近所を歩いている姿がネットに載ったりすると、「顔を潰される」のですから。